

ハリネズミの象徴性
—古代エジプトの場合—

花坂 哲*

The Symbolism of Hedgehogs in Ancient Egypt

Tetsu HANASAKA

古代エジプト人は、あらゆる動物を神聖視し、その固有の能力に対して畏怖と憧憬の念を抱いた。そして神々やさまざまな器物に異能に応じた象徴性を投影した。ハリネズミに対しても、身体を丸め、針毛を立てて身を守る姿に関心を抱き、ヘビやサソリを捕食し、その毒に耐性がある点に驚嘆し、そして、守護の象徴性を与えた。また、夜になると餌を求めて活動を開始し、朝になると巣穴に戻る夜行性の習性に太陽運行のイメージを重ね、砂漠や墓域に生息するハリネズミを再生復活の象徴とした。ところが、こうした象徴性を投影したさまざまな製品を製作したにも関わらず、パハレイヤ・オアシスで確認される唯一の例外であるアブアセット女神を除き、ハリネズミを神聖視せず、神々に列することはなかった。

キーワード：古代エジプト、ハリネズミ、象徴性、守護・再生復活、アブアセット女神

Ancient Egyptians worshiped many animals and had a sense of awe and admiration for the supernatural abilities possessed by wild animals. They projected the symbolism derived from animal's abilities onto various deities and objects. Hedgehogs aroused the Egyptian's interest since they rolled up into a spiky ball to defend themselves from predators. In addition, they were regarded with admiration because they preyed upon snakes and scorpions and were resistant to snake venom and scorpion stings. For this reason, hedgehogs were assigned an apotropaic function and considered a protective symbol. The nocturnal habits of hedgehogs evoked the image of the mythical journey of the sun. Furthermore, hedgehogs living in desert areas or grave yards became a symbol of rebirth and resurrection. Despite this, hedgehogs were not considered sacred or a part of the Egyptian pantheon, excepting one representation of the Goddess Abaset from Bahriya Oasis.

Key-words: Ancient Egypt, Hedgehog, Symbolism, Protection and Rebirth, Goddess Abaset

1. はじめに

多くの古代文明において、人びとはさまざまな動物を神聖視し、崇拝対象としてきた。とりわけ古代エジプトにおいて動物は、狩猟対象となる野生種、生活に有用な家畜、愛玩用のペット以上の存在であった。このことは、神々の姿を獣頭人身あるいは動物そのものの姿で表し、数百万とも数千万ともいわれる膨大な数の動物ミイラが奉納されたことから明らかであろう (Ikram ed. 2005)。古代エジプト人が動物を神聖視し、崇拝対象とした根源には、動物固有の生態や習性、人間が持っていない能力に対する畏怖やある種の憧憬があったに違いない。例えば、身体が大きく力強いこと、素早く動けること、空を飛べること、多産であることなどの能力が挙げられるだろう (Arnold 1995; Germond 2001; Wilkinson 2003)。そして人びとは、動物を模った神像や器物を生み出し、そこに固

有の能力に応じた象徴性を付与したのである。

古代エジプト人が神聖視していた動物種について、ヘロドトス (Herodotus) が「すべての動物」と伝えているように (Hdt 2.65)、むしろ神聖視していない動物種を挙げたほうが早いようにさえ思われる。しかし、本稿で取り上げるハリネズミは、主要な神の象徴とはならず、動物崇拝が盛んな時期にもそのミイラが奉納されることはなかった。ところが、後述するように、ハリネズミを描出したレリーフや壁画、ハリネズミを模った製品 (以下では「ハリネズミ形製品」と総称する) は豊富に残っている。ヤギ、ブタ、ロバなど、神々の世界では存在感が薄い動物種の例を他にも挙げることができるが、これらはその姿を模った製品も少ない。この点でハリネズミの場合と大きく異なっており、この小さな動物が特別な存在であったことを窺わせるのである。

*東京都立大学

Tokyo Metropolitan University



図1 エジプト地図

ハリネズミ形製品の先行研究は、V. ドロステ＝ヒュルスホフ (Droste zu Hülshoff) が網羅的な集成を発表しており (Droste zu Hülshoff 1980)、これが現在も同製品研究の指針となっている。近年、「ハリネズミ船」模型が新たに出土し (Tavares et al. 2015)、その象徴性に関する包括的な論考が発表されて一石を投じている (Hamilton 2022)。また、ハリネズミを頭上に戴いた稀有な女神の3例目となる図像が紹介され (Shaikh Al Arab 2019)、アコリス (Akoris) 遺跡では、これまでに報告例のないハリネズミ皮製の遺物が出土するなど (Hanasaka 2020)、関連資料が出し抜けに増加している (図1)。

ハリネズミ形製品の造形や描出に際して、単に外見だけを写し取ったのではなく、その生態や習性、固有の能力にあやかった何らかの象徴性を投影したと考えるべきであろう。ところが、既存の研究のなかには、ハリネズミの属種の違いや、生態や習性を子細に検討することなく、誤認した習性を象徴性に反映させた例も散見される。そこで本稿では、まずハリネズミの習性をみていき、次に古代エジプト人がそこから導いたであろう象徴性を検討する。そして、ハリネズミ形製品にどのような象徴性を投影したのかを探る。また、神の象徴にまでは昇華せず、ハリネズミが主要な神の一員として列せられることがなかった理由についても考察を加える。

2. ハリネズミの習性とその象徴化

(1) ハリネズミの習性

古代エジプト人が接した動物のなかで、ウシやカバといった大型獣に比べると、小型のハリネズミはいかにも存在感に乏しい。しかし、それでも人びとがこの小動物に格別の眼差しを向けたのはなぜなのか。この小動物の何が人びとに訴え掛け、彼らがそれをどのように認識していたのか。この点を解明するためには、まずその生態と習性から説き起こす必要がある。

そもそも、ハリネズミ科 (Erinaceidae) ハリネズミ亜科 (Erinaceinae) に分類されるハリネズミは、現在、世界に5属16種が知られており、野生種はユーラシア大陸全域とアフリカ大陸の一部に生息する (IUCN 2024) (図2-1)。エジプトに生息する野生種は、通称「砂漠ハリネズミ」と呼ばれるインドハリネズミ属エチオピアハリネズミ (*Paraechinus aethiopicus*) と、オオミミハリネズミ属オオミミハリネズミ (*Hemiechinus auritus*) の2種とされる (Osborn and Helmy 1980: 57-71; IUCN 2024) (図2-2, 3)¹⁾。

砂漠ハリネズミは、マグリブ地方北西部のやや内陸部に入った地域や、リビア・エジプトの地中海沿岸部、アラビア半島、スーダンの一部に生息しており、エジプトではデルタ地帯から西部砂漠の地中海沿岸部に見られる。その名が示すように、乾燥した砂漠地帯に多く生息する (Osborn and Helmy 1980: 57-71; IUCN 2024)。

一方のオオミミハリネズミは、リビア・エジプトの地中海沿岸部から東地中海沿岸部、キプロス島、トルコ東部からイラン、カスピ海周辺、中央アジアから中国・モンゴルに至るまで、非常に広範に分布している。エジプトにおいては、シナイ半島から西部砂漠に至る地中海沿岸部が主な生息圏であり、ナイル河岸域では、カイロから200 kmほど南に位置するサマルート (Samalut) 付近が南限とされる²⁾。砂漠と耕作地の境界の半砂漠地帯や、人間の生活圏に近い、比較的植生が密な場所が活動域である (Osborn and Helmy 1980: 57-71; IUCN 2024)。

現在のエジプトにおける生息圏はほぼ地中海沿岸域に限られ、エジプト南部には生息していないとされる。しかし、1900年代中頃のエジプト南部では、野生のハリネズミを捕獲し、家庭で飼育していたというから (Fakhry 1942: 79)、生息圏が狭くなったのはこの数十年の出来事かもしれない。また、古代エジプトに生息していた動物種のうち、3分の1が絶滅したとされるため (Arnold 1995: 3)、時代の経過による動物相の変化や生息圏の遷移は大きいに違いない。したがって、ハリネズミについても、古代に別種が生息していたことをあらかじめ想定しておくべきである。そ



図2 現代のハリネズミ

1. 現代のハリネズミ生息域；2. 砂漠ハリネズミ；3. オオミミハリネズミ；4. 防御の姿勢を取るオオハリネズミ；5. 中世ヨーロッパの動物寓意譚挿絵 (1. IUCN 2024を基に作成；2. iNaturalist 2024a: ©Roberto Sindaco；3. iNaturalist 2024b: ©gil_dunsky；4. iNaturalist 2024c: ©Jay；5. Wikimedia Commons 2022)

ここで、エジプトの隣接地に現在生息する種を見てみると、アフリカハリネズミ属アルジェリアハリネズミ (*Atelerix algirus*)、ハリネズミ属キタハリネズミ (*Erinaceus roumanicus*)、ハリネズミ属ヒトイロハリネズミ (*E. concolor*) の3種を加えることができる (図2-1)。

エジプトと隣接地域に生息する5種のハリネズミの生態や習性を略述すると (Osborn and Helmy 1980; Santana et al. 2010; IUCN 2024)、成体のハリネズミは体長15~25 cm、体重400~800 gほどを測る種が多い。腹部側に柔らかく短い体毛が生え、長さ1.5~2.0 cmほどの針毛が背中を覆う。その数は6000本ほどを数える。そして、危険を察知すると、その針毛を逆立てて、身体を丸めて身を護ることが特筆される (図2-4)。

後1世紀の大プリニウス (Pliny, the Elder) が『博物誌 (Natural History)』のなかで、「自身を守

り切れない絶望状態に陥ると、腐蝕性のある小便を排出し、(それを塗って) 皮膚や針毛を傷める」と伝えている (Pliny 8.56)。これは、口から吐いた泡/唾液を針毛に塗り付ける「アンティング (anting/self-anointing)」を示している可能性がある。ペット化されたハリネズミの場合、新しい臭いや刺激に接した際にしばしばこの行為を見せるが、その行動理由は明らかとなっていない。

平均寿命は環境に大きく左右されるが、通常は2~5年という。2016年にデンマークで実施された調査によると、野生種の平均寿命はオスが2.6歳、メスが2.1歳であった。ただし、死亡時の年齢が16歳に達する高齢の遺骸も見つかっている (Rasmussen et al. 2019, 2023)。種による差異があるが、妊娠期間は30~40日、出産頭数は1~5匹ほどである³⁾。原則として夜行性であり、日中は岩陰や茂みの中、浅く掘った巣穴で過ごし、日没後に餌を求めて活動する。子育

て中の母子を除き単独で行動し、繁殖や子育てや冬眠の時期が訪れると、通常と異なる場所に巣穴を設けるという。

前4世紀のアリストテレス (Aristotle) は『動物誌 (*History of Animals*)』のなかで、「ハリネズミは風向きが北から南、南から北へ変化すると、それに応じて巣穴の出入り口を変更する」と記している (Aristotle 9.6)。大プリニウスもまた、「ハリネズミが巣穴に身を隠した時は、北東風から南風に変わる確かな兆候を示す」と同じ内容を伝えている (Pliny 8.56)。エジプトでは地中海から吹く北風がナイル河岸では基本となる。ただし、春には「ハムシーン」と呼ばれる南からの強風が、サハラ砂漠の砂を巻き上げながら吹き寄せる。この際には巣穴の場所や開口部の向きを変えるだろうけれども、日常において風向きをどの程度敏感に感じ取れるのかという点について、筆者は知見を得ていない。

次に冬眠である。冬に寒冷となる地域に生息する野生種や、食料が著しく欠乏した際にハリネズミは冬眠するという。しかし、温暖なエジプトに生息する個体は冬眠しないと考えられている (Droste zu Hülshoff 1980; Leonard 2000)。これは種に備わった習性によるだけでなく、生育環境にも大きく左右されるようである。例えば、アルジェリアハリネズミは原産地のモロッコでは冬眠をしないが、スペインやフランスに渡った同種の個体は冬眠するようになるという (Leonard 2000: 313)。また、夏であっても酷暑が続いたり、干ばつになった際には活動を停止して「夏眠」することがある。

最後に食性であるが、バッタやコオロギ、甲虫などの昆虫を好む食虫動物である。ただし、クモやサソリ、ミミズ、カエル、トカゲやヘビなども捕食する。夜行性ではあるが、視力は良くなく、嗅覚と聴覚に頼って餌を探し求める。水分摂取はほとんどを餌に頼るという。飼育環境下にあるオオハリネズミが、餌と水がない状態で10週間も生き延びた記録があり (Ballenger 1999)、世界中のさまざまな気候・環境下に生息する点に鑑みても、耐性と環境変化適応能力が備わっているように思われる。

ところで、現在のヨーロッパでは、ハリネズミがリングやブドウなどの果実を積極的に食するイメージが定着している (Bartnik 2019: 129)。しかし、これは完全な誤認である。おそらく、大プリニウスが「ハリネズミは落下したリングの上で転がり回り、1個を針毛に刺して、1個を啜って巣穴に運ぶ」と伝えたことに端を発する (Pliny 8.56)⁴⁾。このイメージは後1~2世紀にカイロネイアのプルタルコス (Plutarch of Chaeronea) によって広められ、後6~7世紀にセビリヤのイシドール (Isidore of Seville) による『語

源 (*Etymologiae*)』によって定着する。その後、中世に至ってもなお、動物寓意譚に「ブドウを針毛に刺して運ぶハリネズミ」の挿絵が描かれた (図2-5)。19世紀のC. ダーウィン (Darwin) ですら、伝聞とはしているものの、イチゴノキ (*Arbutus unedo*) の実を針毛に刺して運ぶハリネズミについて記していることは (Darwin 1867: 280)、こうした誤認が根強く残ることを示している。ハリネズミは果物を好んで食べることもなければ、針毛に刺して巣穴に運ぶ習性もない。それにも関わらず、誤ったイメージが定着し、流布したことは、古代エジプト人がハリネズミに付託した象徴性を復元する際にも念頭に置いておく必要がある。つまり、本来の生態や習性とは異なる認識に基づいていた可能性がある。

(2) 習性から導かれる象徴性

ハリネズミの身体は小さく、力強いわけでもなく、多産であるとも言い難い。それでは、どのような属性が古代エジプト人を惹きつけたのであろうか。

古代エジプト人が最も興味深く感じたハリネズミの習性は、危険を察知すると身体を丸めて防御の姿勢を取る点だったに違いない (図2-4)。ハリネズミは針毛を攻撃に使うことはなく、身体を丸めてじっと待つだけである。それでも、自身より大きな動物の攻撃に対しても動じることのない姿を見た人びとは、身を護る能力の高さに感服し、それを象徴化したのだろう。この象徴化については多くの研究者の意見が一致するところである (Droste zu Hülshoff 1980; Maître 2017; Hamilton 2022)。

その生息地もまた象徴性を導く因子として働いた。不毛な砂漠・半砂漠地帯は人間の生活環境として適していない。そうした過酷な環境に生息するハリネズミの強靱な生命力にあやかって象徴化したとしても不思議ではない。また、古代エジプトでは、居住地や耕作地から砂漠地帯へと足を踏み入れる一歩手前に墓域を設けることが多かったが、ここはハリネズミの生息圏と重なる。いきおい、墓域付近でハリネズミを眼にする機会が多かっただろう。日没後に活動を始め、夜明けに巣穴に戻る習性は、それだけでも夜の太陽の運行を連想させる。さらに、活動の場が墓域であることは、太陽の運行になぞらえた死者の再生復活とイメージのうえで重ねることができるだろう⁵⁾。

再生復活の象徴性は冬眠する習性と結び付けてしばしば言及される (Ben-Shlomo 2010: 144; Recht 2014: 47; Bartnik 2019: 130)。ただし、これに言及しているのはエーゲ海や東地中海の物質文化を専門とする研究者である点は注意を要する。地中海以北に生息するハリネズミは冬眠をすることが多いため、その習性をエジプトに生息するハリネズミにも適用していると思わ

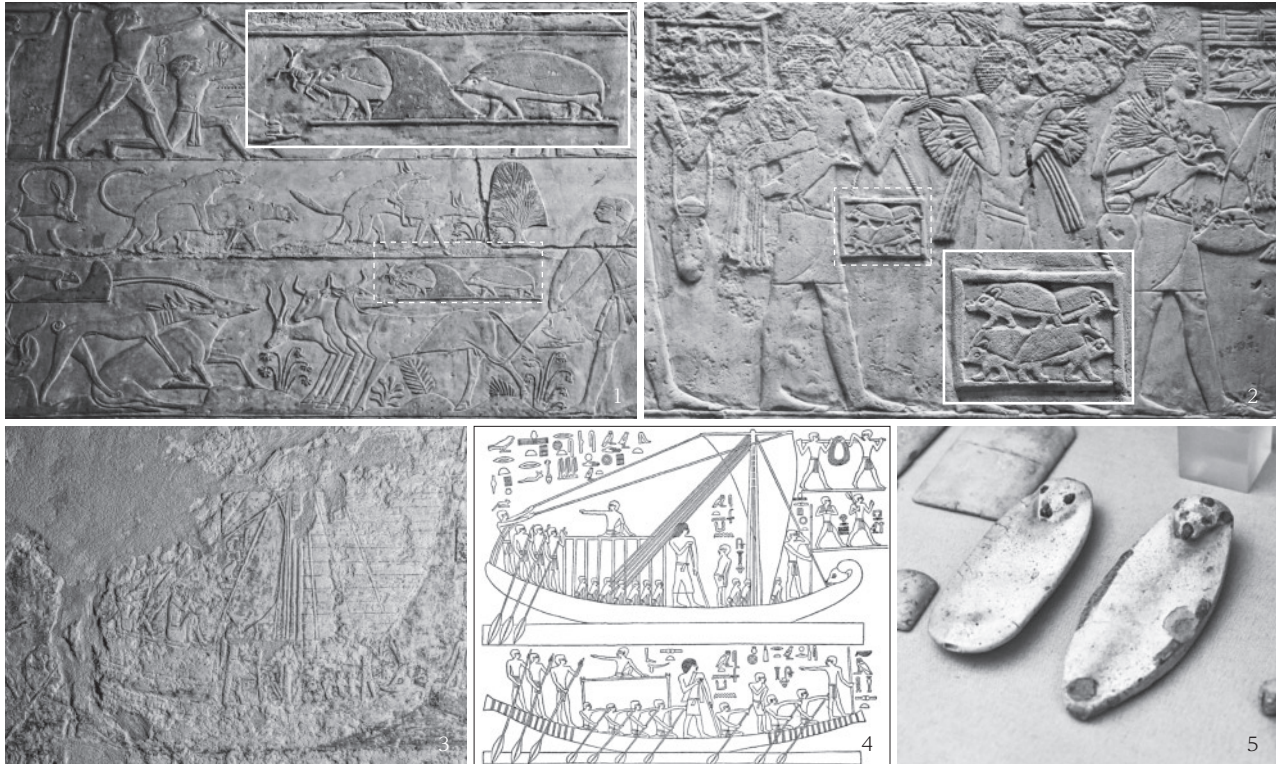


図3 ハリネズミ形製品 (1)
1. 砂漠の狩猟図；2. 供儀図；3. ハリネズミ船；4. ハリネズミ船とパピルス船；5. ハリネズミ船模型 (4. Junker 1934, Abb. 22；5. 和田浩一郎氏提供)

れるからである。彼らは当該地域から出土する後期青銅器時代のリュトンがハリネズミを模っている理由としても、古代エジプトの例を出して、再生復活と結び付けている (Ben-Shlomo 2010; Recht 2014)。これに対して、ギリシアやレヴァントの生息種も冬眠が必須ではないとして、「冬眠＝再生の象徴」という図式が成り立たないとする指摘もある (Leonard 2000)。

前述の通り、エジプトに生息するハリネズミは冬眠しないとされる。そもそも冬眠や夏眠という習性が鮮明になったのは、動物行動学の研究が進んだ現代に至ってのことであるから、古代エジプト人が果たしてこの習性を認識していたのかどうか疑問がある。したがって、再生復活の権能を有する存在として象徴化に導いた因子としては、夜行性の生態を挙げるべきであろう。

また、夜行性ではあるが、ハリネズミの視力が良くないことは既述した。しかし、古代エジプト人ならずとも、夜間に行動するハリネズミを見れば、夜目が利くと誤解するのは当然である。古代エジプト人が眼に関する呪力を重視していたことは、男女ともに太いアイラインで眼を縁取ったり、守護、強さ、完全さなどを象徴する「ウジャト」と呼ばれるホルス神の眼を象った護符が人気を集めたことから窺える。したがって、誤解に基づくにせよ、視力が良いと認識して

いたことは大いにあり得る。

最後に、ハリネズミの食性についてであるが、これもまた象徴化に影響したのだろうか。砂漠での狩猟場面を描いた墓のレリーフに、イナゴを捕食する姿がある (図3-1)。現在のヨーロッパで、庭の害虫を捕食するハリネズミを益獣と見做すように、古代エジプト人も、穀物に被害を与える害虫の代表格であるイナゴを捕食するハリネズミを有益な動物として認識していた可能性がある (Evans and Weinstein 2021: 52)。これ以上に、古代エジプト人がハリネズミを特別視した大きな理由は、人間にとって非常に危険なサソリやヘビを捕食し、その毒に耐性がある点であろう (Droste zu Hülshoff 1980; Maître 2017; Evans and Weinstein 2021)。1900年代中頃のエジプト南部地域では、ヘビ避けのために野生のハリネズミを捕獲し、家で飼育していたという (Fakhry 1942: 79)。この場合のハリネズミに付与される象徴性も守護となろう。なお、古代エジプト人が、針毛に泡を塗り付けるアンティングの行動を見た際に、その泡によって毒への耐性を得ていると勘違いした可能性も指摘できる。

3. ハリネズミ形製品と投影された象徴性

時代の経過による動物相の変化や生息圏の遷移が大

きいと思われることは上記の通りだが、それを示すように、アスワン (Aswan) から 100 km ほど西進した西方砂漠のナブタ・プラヤ (Nabta Playa) 遺跡から、前 7 千年紀の新石器時代に遡るハリネズミの骨が見つかった (Wendorf and Schild 1995/1996: 35)。したがって、生息圏は現在よりも遥かに広く、古代エジプト人がハリネズミを眼にする機会が多かったことが推測される。王朝時代を通じて、さまざまな製品の題材になったことがそれを物語っているだろう。ドロステ＝ヒュルスホフが網羅した該当資料の集成は、その意味で有益であり、至便でもある (Droste zu Hülshoff 1980)。そこで、それを参照しながら以下の叙述を進めていこう。

さて、エジプトにおけるハリネズミ形製品の最古例は先王朝時代ナカダ I / II 期まで遡り、ルクソール近傍のディオスポリス・パルヴァ (Diospolis Parva) 遺跡出土の白線交線文土器の図像をもって嚙矢とするという (Petrie 1901: pl. 14, no. 93b)。その図像は、放射状に広がる線を添えた 2 個の小円で表されたものだが、写実性を欠き、ハリネズミを描いた確証とまでは言えない。明瞭なハリネズミの図像資料は古王国時代から知られ⁶⁾、特にサッカラ (Saqqara) の高官墓のレリーフは写実度の点でも、数の上でも申し分ない。ハリネズミが登場するコンテクストは一樣ではなく、一つは砂漠の狩猟図、もう一つは墓主への供献図である (Droste zu Hülshoff 1980: 53–92)。そこで、両画面に分けて詳述していく⁷⁾。

(1) 砂漠の狩猟図

砂漠での狩猟場面は、古王国時代の墓を飾るレリーフの題材として一般的である。狩猟者が矢を放ち、傷ついたガゼルやアイベックスなどの野生動物を猟犬が仕留める場面を描く。狩猟者と狩猟対象の野生動物を同じ水平線 (レジスター) 上に大きく配する一方で、余白に補助的な水平線を引き、その上にハリネズミやノウサギなどの砂漠に生息する小動物を小さく添えている (図 3-1)。ガゼルやアイベックスは昼行性であり、ハリネズミやノウサギは夜行性である。実際の狩猟の時間帯に夜行性動物は姿を見せていないはずであるから、これらの図像は実際に写したものとは言えないだろう。そこで、砂漠の狩猟図は、砂漠や野生動物が表す無秩序で混沌とした世界を狩猟によって人間が制御し、世界の秩序を保つことを象徴するものとして解釈されてきた⁸⁾。

こうした図像は後代に引き継がれるが、そこにハリネズミを添えた例のほとんどは古王国時代墓が占める (Davies 1900: pls. 21, 22, 1920: pls. 5a, 6; Duell 1938 pls. 24, 25 など)。しかし、場面の一角にこの小動物を添えた理由は定かでない。猟犬に襲われたり、

危険を察知して身体を丸めた例は見当たらず、巣穴から出てイナゴを捕食し、あるいは歩を運ぶ平穏な姿を写している。この様子から察しても、狩猟対象であったとは考えにくい。狩猟の場に相応しくないハリネズミをあえて描写したことは、何らかの意味があったはずである。

この点で、狩猟地が砂漠・半砂漠地帯であったことを示す目的でハリネズミを描写したとする説は一考に値する (Droste zu Hülshoff 1980: 20–21; Strandberg 2009: 47–51)。すなわち、砂漠を表す赤い点や、灌木や丘陵地などの自然風景に加えて、ハリネズミやノウサギなどの小動物を配することで、狩猟環境を強調しているというのである。あるいは、小動物を補助的な水平線上に描くことで、狩猟による混乱と対比をなす、本来的に内在する平穏な世界を暗示させているという解釈もある (Strandberg 2009: 50–51)。

また、狩猟者とハリネズミの顔の向きが一致する例が多いという指摘もある (Droste zu Hülshoff 1980: 20–21, 46)。前述の通り、ハリネズミは風向きの変化を読むことができるとされる。狩猟者はハリネズミを観察することで風向きの変化を読み、獲物に気づかれないように風下に立つことで狩猟を成功に導くことができる。つまり、狩猟の成功を願う象徴としてハリネズミを描いたというわけである。

ところで、古代エジプトの美術様式にはさまざまな規範がある。補助線上に小動物を描いた理由も、画面の空白を嫌い、余白を埋める美術規範に則った可能性が指摘されている (Droste zu Hülshoff 1980: 20)。他にも、奥行き表現に遠近法を用いないことや、社会的階層が高い人物を大きく描くことなどが知られる (Schäfer 1986; Wilkinson 1994; Davies ed. 2001)。ところが、動物を描く際は必ずしもこうした規範は適用されない (Evans 2010, 2015, 2020)。ガゼルやアイベックスと同じ水平線上に、大きさの変わないハリネズミを描いた例も見出されるし、補助線上に小さく描くことで、砂漠の遠くの風景を表す、すなわち遠近法で描いた可能性もある。実景でもなく、美術規範通りでもなく、あえて狩猟図にハリネズミを描出したわけであるから、これには何か理由があったはずである。この小動物を砂漠の暗喩に使ったとも、狩猟の成功を導くことを明示するためであったとも考えることができるであろう。ともあれ、ハリネズミの象徴的意義が重視されたことは疑いない。

(2) 供献図

もう 1 種の図像に登場するハリネズミは、墓主に献上する供物の一部を構成している。召使が運ぶ供物には、種々のパンやビール、さまざまな部位の食用肉、植物、香油、生きた野生動物などが含まれる。ウシや

ガゼルはロープで引き、野鳥は羽根や頸を掴んだり、籠に入れたりして運んでいる。ハリネズミは四角い手提げ箱に入れており、箱の中に1匹だけ入れた場合が多いが、2~4匹の例も少なくない（図3-2）⁹⁾。

献上するハリネズミが食用目的だったのか否かについての議論は決着をみていない。どちらの立場を取るかによって、先の狩猟図に描写されたハリネズミの解釈にも関係してくるので、ないがしろにできない問題である。なお、現在のエジプトでは日常的な食肉としての利用はないが、アジアやアフリカの一部では、野生のハリネズミが食用肉として流通しているという（Nijman and Bergin 2015）¹⁰⁾。

古王国時代の限定的な例ではあるが、供物として捧げられることを理由に、古代エジプト人はハリネズミを食していたとする見方がある（Droste zu Hülshoff 1980: 22-23; Houlihan 2001: 87-88）。また、主要な食用動物ではなかったけれども、調理法次第で十分に食用になり得たとも説かれている（Ikram 1995: 22）。これらの所説に加えて、ドロステ＝ヒュルスホフが挙げた古王国時代の17例の狩猟図と、12例の供献図のうち、5例が同一墓に併存することを強調するならば¹¹⁾、少なくとも一部の狩猟図の例については、登場するハリネズミにも別の解釈を与える余地が生まれてくる。すなわち、ハリネズミを狩猟図に描いた理由は、食料獲得のために、巣穴や物陰に潜むハリネズミを捕獲していたためと考えられるからである。

食用説の根幹には、大プリニウスによる「体に尿をこすりつける前に、頭を一撃で叩いて殺したハリネズミの肉は美味であるらしい」という叙述の印象があるのかもしれない（Pliny 30.21）。しかし、これは尿路結石に対する特効薬として紹介したものであり、ハリネズミの特徴や習性を記した個所に食用に関する記載はない（Pliny 3.56）。

一方で、非食用説に立つ論者も少なくない（Osborn and Osbornová 1989: 22; Strandberg 2009: 20; Hamilton 2022: 2）。食用に関する文字史料と考古資料の双方を欠いていること、また、ハリネズミを含んだ供献図は古王国時代に集中しており、後代にはほとんど見られないことからすると、こちらの説が有力視されるだろう。

文字史料も考古資料も欠くため、ハリネズミを常食していたとは考えにくい。ただし、大プリニウスが書き残し、現代の民族例でも珍しくないため、薬用としてならば口にしていた可能性は残る。高い効能が期待される薬用動物を墓の供献図に描くことは妥当であろう。しかし、そうであるならば、供物リストや文字史料が残っていそうなものだが、それは見当たらないのである。その点で、供献図に少なからず登場するハリネズミは、やはり食用とも薬用とも言い難い。

ハリネズミが供物として献上された理由について、食用説に代わり、護符などと同様の象徴的な役割を担っていたとする見方がある（Osborn and Osbornová 1989: 22; Evans and Weinstein 2021: 52; Hamilton 2022: 20）。すなわち、ハリネズミが入った箱を実際に墓に置いたかどうかはともかく、暗い岩場を好むへびやサソリから墓主を護る役割を担っていたとする。不可知の災厄から墓主を護る守護の象徴としてならば供物に相応しい。加えて、古代エジプト人にとって最も重要な再生復活の象徴性も帯びているとなれば、ハリネズミは墓に献上される供物として最適であったと言えるだろう。

(3) ハリネズミ船

狩猟と供献の図像の他にもハリネズミを表現した例がある。それが船首をハリネズミ形に模った「ハリネズミ船（*Henet-boat*）」の図像と模型である。後頭部を進行方向に向けたハリネズミの頭部だけを船首に造形したもので、手足や針毛は表現していない（van Haarlem 1996; Altenmüller 2000, 2002, 2005; Hamilton 2022）¹²⁾。

まず図像例から取り上げると、主にギザ（Giza）とサッカラの20基ほどの高官墓のレリーフに見られ、第5王朝期を中心とする古王国時代に限定される。航行目的や動力によって7種（Altenmüller 2000: 3-18）、あるいは5種（Hamilton 2022: 10）に分類されている。墓主が来世へと向かう際に乗る葬送船の例が多く、通常は帆を張った帆船として表現される（図3-3）。それではなぜ、船首をハリネズミの頭部に造形したのであろうか。

ハリネズミは泳ぎが得意ではないため、円滑な航行を象徴する存在としては相応しくない¹³⁾。そこで注意を引くのが、船首のハリネズミ像が顔を船室方向に、後頭部を進行方向に向けている点である。これは背を丸めた防御姿勢を連想させるものであり、ハリネズミは墓主と乗組員の安全な航行を担保する象徴であったと考えられる。加えて、誤解ではあるが、ハリネズミは夜行性ゆえに視覚が発達しており、風向きを読む能力にも長けているとされていた。それゆえ、触先に立つ水先案内人としての役割も託されていたのであろう（Droste zu Hülshoff 1980: 26-27; van Haarlem 1996: 198）。

ところで、ハリネズミ船は「パピルス船（*Shabet-boat*）」と船団を組み、同一画面に描いた例も多い（図3-4）。パピルス船とは、大量のパピルス束を束ねて作った小舟の形状を模した木造船であり、通常は櫂船として描出する。ナイル河の航行において、帆船は北からの順風を受けて南行する、ナイルを遡る船であり、櫂船はナイルの流れに乗って北行する船である。

ところが、レリーフに添えられた銘文を見ると、帆船のハリネズミ船が先導する船団は、「西の運河」を通して、「供物の野」に向かっており、櫓船のパピルス船が先導する場合は、「美しき西方」へ航行していることが分かる。すなわち、これらの船は天空を航行する葬送船であり、パピルス船が「昼の船」、ハリネズミ船が「夜の船」を象徴しているとする解釈がある (Altenmüller 2000, 2002, 2005)¹⁴⁾。ハリネズミの夜行性の習性に合致する点でこの解釈には説得力がある。

ハリネズミ船には、パピルスの茂みや沼沢地での狩猟に使う小型の櫓船もある。この場合、「夜の船」のような象徴性とは無縁であるから、むしろ、カバやワニなどの水中の危険な動物から船と乗員を護り、安全な航行を願う厄除けの象徴であったとすべきだろう。いずれにせよ、葬送船と狩猟船とでは構造や規模が異なり、その象徴性も異なる。そのため、ハリネズミ船に特定の機能を求めるべきではないとする慎重な見解もある (Hamilton 2022: 17-18)。

次に模型である。素材、大きさ、甲板部の表現に差異が認められるものの、いずれの模型も進行方向に後頭部を向けるハリネズミの頭部を船首に飾る点で共通する (図 3-5)。遺跡数こそ多くないが、出土地はエジプト全土に跨っている¹⁵⁾。例えば、ギザの「ケントカウエス女王の町」(Khentkawes town) 遺跡では大型の石製模型片が出土した (Tavares 2014; Tavares et al. 2015)。また、デルタ東部のイスラエル国境に近いテル・イブラヒム・アワド (Tell Ibrahim Awad) 遺跡の神殿址 (van Haarlem 1996) や、ダハシュール (Dahshur) (Fakhry 1961) からは土製の模型片が、アスワンのエレファンティネ島 (Elephantine) にあるサテト女神に捧げた神殿からは、ファイアンス製の模型がそれぞれ見つかった (Hamilton 2022)。とりわけエレファンティネ島の出土数は 47 点を数え、当初、発掘者たちにハリネズミ信仰がこの地にあったと考えさせたほどであった (Hamilton 2022: 8)。

ハリネズミ船模型は神殿からの出土例が多いため、その用途は私的な奉納品であり、民間信仰 (popular beliefs) を示していると説いた先学の指摘は的を逸していないと思われる (Tavares et al. 2015: 555)。ただし、墓からの出土品が含まれていない点は一考に値する。すなわち、模型には「夜の船」という解釈が合致しないのである。この点について、レリーフと模型の両者ともに、現実の航行も表している可能性が指摘されている (Tavares et al. 2015: 555; Hamilton 2022: 14-15)¹⁶⁾。そこでこの所見を踏襲し、模型を広く守護の象徴として、実際の航行の安寧を祈願する目的で乗組員が奉納したと理解しておこう。

(4) ファイアンス製小像と護符

ハリネズミの造形品には 20 数点の小像も知られている。出土地や来歴などの詳細が不明な例も少なくないが、多くは中王国時代の製品と考えられている (Droste zu Hülshoff 1980: 129-143; Miniaci 2017)。薄い楕円形の台座が付く例と付かない例があるが、いずれも長さ 5~10 cm ほどを測り、手足を伸ばした立像 (図 4-1)、あるいは伏臥像である。大半がファイアンス製であり、格子状の線刻や黒点、あるいは粒状の突起によって針毛を表現している。

中王国時代のファイアンス製品の出土は葬送に関連する傾向にあり、神殿や一般住居からの出土例は少ない (Miniaci 2017)¹⁷⁾。ハリネズミ小像に関しても、多くは副葬品であったと推察される。所有者が死者であれ生者であれ、守護の役目を帯びていたならば、身体を丸めて防御の姿勢を取った小像があっても良いはずである。ところが、そうした防御姿の小像が見当たらないことは、姿勢に関わらず、ハリネズミ自身が守護の象徴性を帯びていたためと解釈できるだろう。

防御姿を写したと見做すことができる例として、完全な球形に近いボール状のファイアンス製品がある (図 4-2)。わずか 3 例しか知られていないが、いずれも直径 6 cm ほどを測り、わずかに盛り上がった小さな顔と手足を造形する。針毛の表現は、2 例は黒点で、もう 1 例は線刻で行っている (Droste zu Hülshoff 1980: 142-143)。同じく防御姿を連想させる小品として、ファイアンス製の「ラトル／がらがら」がある (図 4-3)。こちらも数例しか知られていないが、長さ 5~8 cm ほどのハリネズミ船のような細長い形状を呈する。平坦な腹側にわずかに突出した顔が造形され、背中側は丸みを帯びている (Droste zu Hülshoff 1980: 144-145)。振ったときにカタカタと鳴る音は、ハリネズミが餌を探す際に出す音を連想させるという (Droste zu Hülshoff 1980: 32)¹⁸⁾。

ボール状製品とラトルは玩具として作られた可能性がある。しかし、音によって有害な動物や悪霊を追い払う効果を期待していたとすると、用途は護符となるだろう。いずれにせよ、出土状況が定かでなく、例も少ないため決め手を欠く。

新王国時代に入ると、「スカラボイド (scaraboid)」と呼ばれる、スカラベ印章の形をしたハリネズミ形製品が大量に作られるようになり、それが末期王朝時代まで続く (図 4-4)。ドロステ=ヒュルスホフの集成では 300 点ほどが紹介されているが、出土地が判明している例は 50 点ほどに留まる (Droste zu Hülshoff 1980: 151-268)。スカラベ印章全般に当てはまることではあるが、ハリネズミ形スカラベ印章の出土地はヌビアやパレスチナ地方にも及んでおり、広く各地で受け入れられていたことは疑いない。



図4 ハリネズミ形製品 (2)

1. ファイアンス製台座付き小像；2. ファイアンス製ボール形小像；3. ファイアンス製ラトル；4. ファイアンス製護符；5. 土製ハリネズミ形リュトン；6. ファイアンス製アリュバロス；7. 土製アリュバロス；8. ヒエログリフでの「ハリネズミ」；9. 皮製の蓋 (1. Brooklyn Museum 2019: 65.2.1；2. The Metropolitan Museum of Art 2024: 1989.281.91；3. Brooklyn Museum 2019: 59.186；4. The Metropolitan Museum of Art 2024: 30.8.846；5. The Trustees of the British Museum 2024: 1898,1201.131；6. The Trustees of the British Museum 2024: 1905,0928.1；7. The Trustees of the British Museum 2024: 1860,0404.34；9. アコリス遺跡調査団提供)

ファイアンス製と施釉石製がほとんどを占め、形状は多くのスカラベ印章と同様に長さ1~3cmほどの小品が多い。楕円形の台座の上にハリネズミが立ち上がり、足の間が透かしになっている例と、伏せた姿で台座と密着した例がある。針毛の表現は格子または斜め格子の線刻によるものがほとんどである。姿態はこうに立像か伏臥像に限られ、小像の場合と同様に、身体を丸めた防御姿の例が見当たらない。

ハリネズミ形護符の印面のデザインは、ドロステ＝ヒュルスホフがこれを文様、人物・神・動物の姿、請願文、神名、王名など9種類に分類している (Droste zu Hülshoff 1980: 157-268)。王名と形容辞には、新王国時代第18王朝のトトメス3世の即位名である「メン・ケペル・ラー」を記した例が目立つ。しかし、スカラベ印章と同じく後代に流行したデザインのひとつと考えられるため、護符の帰属年代の判別材料とはならない。神々の姿はベス神像が多数を占め、神名と形容辞はアメン＝ラー神が、神々への請願文で

は「ラー神より与えられたもの」と「バステト女神が良きものを与えてくれんことを」という内容が多い。また、動物はワニとサソリが多数を占める。家庭や妊婦を守護するベス神の姿や、多産を象徴する母なる女神のバステト女神への請願文が多く登場することは、日常生活や家庭の守護を願った庶民の思いが反映されているからであろう。

(5) 容器

東地中海・メソポタミア地域の事例を見ると、ハリネズミの全身を模った容器は、シリアのテル・ボクラス (Tell Bouqras) 遺跡出土の前7千年紀後半まで遡る石製容器を初現とする (Koehl 2018: 47)。その後も、リュトンに代表されるように、動物を模った容器が作られ続けた。ハリネズミは人気の題材の一つであり、特に後期青銅器時代にあたる前1500~前1200年頃には、ハリネズミ形リュトンがエーゲ海・東地中海一帯で流行した (Leonard 2000; Ben-Shlomo

2008, 2010; Recht 2014) (図4-5)。

一方、古代エジプトにおけるハリネズミ形容器の最古の例は、ディオスポリス・パルヴァ遺跡 B387 号墓出土の前4千年紀のナカダ期に属する土器である (Petrie 1901: pl. XIV, no. 67)。始まりはハリネズミの全身を模った土器であったが、その後のエジプトでは、ハリネズミはおろか動物の全身を模った容器が流行することはなく、末期王朝時代の第26王朝期まで待たなければならなかった。

さて、第26王朝期に流行を迎えたハリネズミ形容器は、「アリュバロス (aryballos)」と呼ばれる、香油や化粧品を容れる小さなファイアンス製の容器であった (図4-6)。前8世紀頃の古代ギリシアに起源を持つアリュバロスは、球形の胴部に細く短い頸部を挿し込み、その先端を平らで広い口唇部に仕上げて、口唇部と胴部を一条の把手で繋ぐ。これを典型とした。後に胴部を人間の頭や手足、動物で模ったものが登場し、なかでもファイアンス製のハリネズミ形アリュバロスが人気を博した (Webb 1978, 2015; Kubala 2017)。

デルタ西部に位置するナウクラティス (Naukratis) がギリシア圏との交易拠点となった前7世紀半ば以降、ファイアンス製のハリネズミ形アリュバロスは、ポリスの植民市建設に伴って地中海全域に分布を広げる。レヴァント地方やキプロス島はもちろんのこと、スペイン北東部のアンプリアス (Ampurias) や黒海北部のオルビア (Pontic Olbia) にまで至っている (Webb 1978: 8, 2015: 2)。前6世紀半ばに流行の最盛期を迎えたが、前525年にエジプトがアケメネス朝ペルシアの支配下に入るとともに、その流行も終焉を迎えたという (Webb 2016: 10)。

容器の内容物について、ギリシア圏では香油だったとされるが (Leonard 2000: 314-315; Bartnik 2019: 132)、エジプトの場合は、化粧品、特に眼の周りを縁取る「コール (kohl)」容れとして言及される (Droste zu Hülshoff 1980: 29; Houlihan 2001: 87)。ハリネズミは視力が良いと認識していたため、その能力にあやかって、眼に関する化粧品を容れたのだろう。また、油であれば、後述の医術パピルスに記された禿・抜け毛対策用の油であった可能性がある。

ファイアンス製ハリネズミ形アリュバロスは、エジプトだけでなく、地中海全域で出土することから、その製作地や起源についての議論が尽きない。起源について、かつて V. ウェブ (Webb) は、エーゲ海・東地中海地域で出土する「土製」のハリネズミ形アリュバロス (図4-7) が「ファイアンス製」に影響を与えたと指摘した (Webb 1978)。つまり、ギリシア人がナウクラティスに移住した後にファイアンスで製作し、それを海外に輸出したことを意味する。しかし、

現在は自身の考えを改めており、エジプトのファイアンス製ハリネズミ形アリュバロスが先行していた可能性が高いとしている (Webb 2015: 3)。

モノや技術が伝播する際には、同時にそこに込められた象徴性も伴ったことが推察される。エジプトにおけるハリネズミの象徴性が、どこへ、どのように伝わり、当該地で受容されたのか否か。あるいは他の地域からどのような影響を受けたのか。これらについては稿を改めたい。

(6) 文字史料

古代エジプト語でハリネズミは「*ḥntj*」または「*ḥntj*」と表記する (Erman and Graspow 1971 Wb III: 121 [15], 122 [7]; Hannig 2000: 658) (図4-8)。しかし、これらの単語の正確な訳語は分かっておらず、「ヤマアラシ」と訳される場合も少なくない。

墓主に献上する供物として運ばれるハリネズミが、古王国時代の墓のレリーフに見られることは上述の通りであるが、同じく墓に刻まれた「供物リスト」には、この小動物に関する記載は管見の限り見当たらない。ハリネズミ形製品の種類や出土点数に比べると、この動物に言及した文字史料は驚くほど少ない。

「*ḥntj*」または「*ḥntj*」の語は、「医術パピルス」と呼ばれるエーベルス・パピルス (*P. Ebers*) とエドウィン・スミス・パピルス (*P. Edwin Smith*) のなかに数回見られるだけである。例えば、エーベルス・パピルスには、詳細不明の「*nssk*」病によって引き起こされる禿・抜け毛の治療法として、「ハリネズミの針毛を油脂で焼き、それを4日間かけて頭皮に塗布する」(*P. Ebers* 66: 12) という記載がある。また、「*nssk*」病自身に対しても、「ハリネズミの針毛を焼き、油脂に浸して塗布する」(*P. Ebers* 92: 7) という対策が載る (Ghalioungui 1987: 130, 197)。

ローマ時代にもハリネズミを用いた禿・抜け毛対策が伝わっている。後1世紀のペダニウス・ディオスコリデス (Pedanius Dioscorides) による『薬物誌 (*Materia Medica*)』に、「ハリネズミの皮を焼き、樹脂と混ぜて塗布する」という治療法が伝わる (Dioscorides 2.2)。一方、同時代の大プリニウスが書き残した脱毛や頭皮の病気に関する治療法を見ると、クマの脂、シカの角、ヤギや雌ブタの胆汁、ロバの性器、ウサギの肉など、さまざまな動物由来の薬剤を挙げているものの (Pliny 28.46)、そこにハリネズミは含まれていない。反対に、脱毛の促進剤としてハリネズミの胆汁を紹介している (Pliny 30.46)。また、ハリネズミを薬用で用いる例として、肉が膀胱結石に (Pliny 30.21)、胆汁はすべての疣に効くと伝えている (Pliny 30.23)。

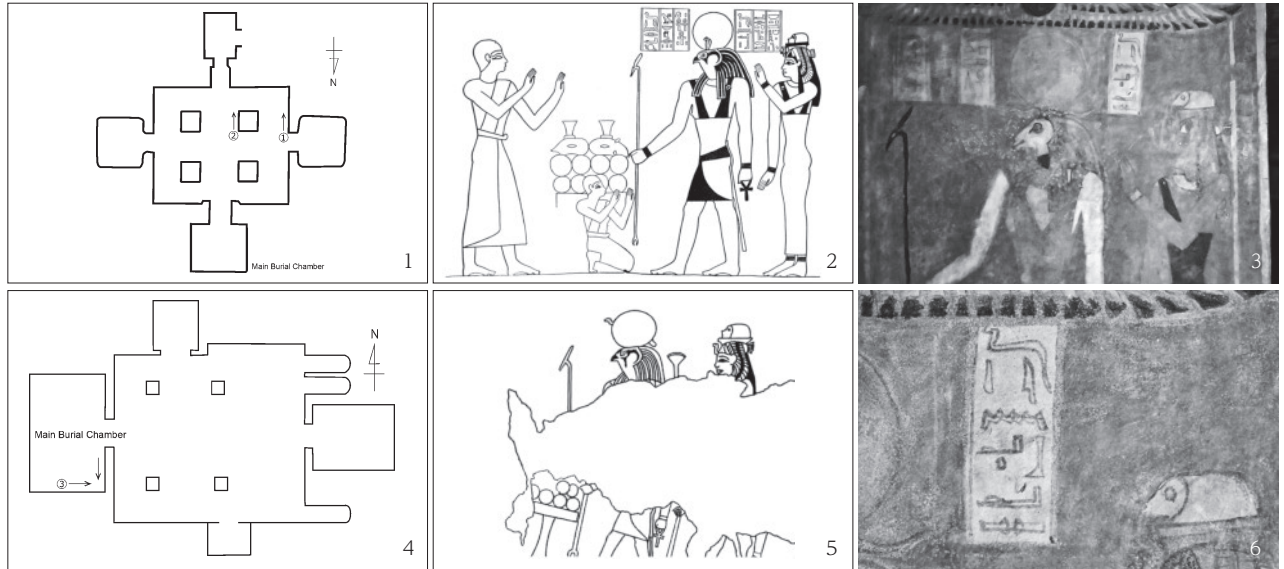


図5 アプアセト女神

1. バンネンティウ墓の平面プラン；2. 1例目のアプアセト女神；3. 2例目のアプアセト女神；4. ハッラ地区被葬者不明墓の平面プラン；5. 3例目のアプアセト女神；6. tの文字が欠落したアプアセ（ト）女神の表記（1. Fakhry 1942: fig. 25 を基に作成；2. Fakhry 1942: fig. 35；4. Shaikh Al Arab 2019: fig. 1 を基に作成；5. Shaikh Al Arab 2019: fig. 4）

(7) 製品の素材

ハリネズミの皮や針毛を治療薬に利用していたらしいことが文字史料から知られるが、薬用以外の利用法をアコリス遺跡出土の皮革製品が伝える（Hanasaka 2020: 17–18）。第3中間期に帰属する埋土中から出土した皮は、直径8.3 cmほどの円形を呈する（図4-9）。茶褐色の色調であるが、植物タンニンで鞣した「革」ではなく、自然乾燥した「皮」と考えられる。現在、針毛はすべて失われ、わずかに突出した毛根部を残すのみである。丸剥ぎした皮は、頭部（顔部）と尾部を切り落とし、四肢は残してあったと思われる。また、脚部の先端が一部欠損しているものの、左前脚に結び付けた亜麻紐が残り、右後脚にも紐の痕跡が残る¹⁹⁾。形状が円形であり、結び留め用と思しき紐が残る点、当該地区出土の貯蔵用土器の口径の多くが8 cmほどである点を考え合わせると、この皮製品は土器の蓋として実用に供されていたと推測される。土器には貴重品を保管しており、それを護るために守護の象徴性を備えたハリネズミの皮を蓋としたのだろう。

4. アプアセト女神の信仰

あらゆる動物が神聖視されていたにも関わらず、ハリネズミは古代エジプトの主要な神の象徴ではなかった。ところが、1942年のA. ファクリー（Fakhry）の報告によって、初めてハリネズミと神々の関係が知られることとなった（Fakhry 1942）²⁰⁾。それが「アプアセト」の名前を持つ、ハリネズミを頭上に戴く女神

である。現時点では、西方砂漠のバハレイヤ・オアシスにある、末期王朝時代の第26王朝期の2基の墓でのみ確認されている。その他の地域や時代において、その名前も姿も知られていない（Leitz ed. 2002: 88）。

アプアセト女神の図像は計3例が残る。3例のうち2例は、バハレイヤ・オアシスの中心地であるバウィーティ市（el-Bawiti）のカスル・サリム地区（Qasr Salim）に位置する、地域の有力者であったバーエンネンティウ（Ba-n-nentiu）墓に見ることができる（Fakhry 1942; Porter and Moss 1975: 305–307）²¹⁾。もう1例は、バウィーティ市の中心部から東へ20 kmほどのハッラ地区（el-Harra）にある被葬者不明の墓に残る（Shaikh Al Arab 2019）。どちらの墓も地下へのシャフトを降りると、4本の列柱がある正方形に近い前室が拡がり、正面奥に主埋葬室を備え、左右に副室を設けたプランを呈する（図5-1, 4）²²⁾。

1例目のアプアセト女神像はバーエンネンティウ墓の前室西壁に見られる（図5-1内の①）。左面（南側）に、右手を向く立ち姿と跪いた姿の2体の墓の主人と、その主人と対峙するラー＝ホルアクティ神とアプアセト女神が並ぶ（図5-2）。そして副室入り口を挟んで右面（北側）に、アトゥム神とイシス女神、ケプリ神、ヘカ神とセクメト女神、バネブジェド神が順に続く（Fakhry 1942: 78–81, figs. 35, 36, pls. xxviii–b, xxix–b）。

2例目は、バーエンネンティウ墓前室の4本の角柱のうち、南西の角柱の東面に描いてあり（図5-1内の

②)、アブアセト女神はバネブジェデト神(?)に追従する(図5-3)²³⁾。残る3本の角柱にもそれぞれ一対神を配し、シェウ神とテフヌト女神を北西柱東面、ゲブ神とヌト女神を南東柱西面、オシリス神とイシス女神を北東柱西面に振り分けてある(Fakhry 1942: 84, figs. 25, 40-43, pl. xxx-b)。

3例目はハッラ地区の墓の例である(Shaikh Al Arab 2019: 85-92)²⁴⁾。主埋葬室東壁の右面(南側)に、右手を向く立ち姿の墓主とその妻を配する。図像は埋葬室南壁へ続き、墓主たちと対峙する7柱の神々を描き並べる(図5-4内の③)。先頭からラー=ホルアクティ神とアブアセト女神(図5-5)、ケプリ神とマアト女神、アトゥム神、イシス女神(またはハトホル女神)、ネフティス女神と続く。

これら3例のアブアセト女神は、いずれも人間の女性の姿をとり、丈の長いタイトな赤色のワンピースを着用する。ネックレス、ブレスレット、アンクレットで身を飾り、黄色に彩色した、翼を広げたハゲワシ形の冠を被る²⁵⁾。そして、冠の上に水色に塗彩したハリネズミを載せている。なお、針毛の表現はない。

アブアセト女神の名前は、パーエンネンティウ墓の図像に伴う銘文で確認できる。ただし、2例目の図像に伴う銘文は「t」の文字を欠く(図5-6)。他の時代や地域では一切知られていない女神のため、「Ab'as」(Fakhry 1942: 78-79)や「b'st」(Droste zu Hülshoff 1980: 93; Leitz ed. 2002: 88)など、ヒエログリフの転写も一様でなく、名前が持つ意味にも異説がある。一連の銘文を「b (to praise/to boast)」と「st (Isis)」に分けることができるならば、「イシス女神を讃える」あるいは「イシス女神を誇る」と釈読できる。

ここで野生のハリネズミの生態と習性から導いた象徴性に照らしながら、アブアセト女神の神性を検討してみよう。

1・3例目は、太陽円盤を頂くホルスの頭部を持つラー=ホルアクティ神に、2例目は、太陽円盤を頂く雄ヒツジの頭部を持つバネブジェデト神(?)に追従していた。いずれも太陽神である。既述の通り、習性から導かれたハリネズミの象徴性の一つは太陽の運行であり、レリーフ上のハリネズミ船は「夜の船」を象徴するものと考えられた。つまり、「昼の太陽船」を司る太陽神とアブアセト女神で昼夜の太陽運行を表しているわけである。また、太陽神が夜の冥界を航行する際に最大の障害となったのが、ヘビの神アポフィスであった(Wilkinson 2003: 221-222)。そこで、ヘビを捕食するハリネズミ、すなわちアブアセト女神に、アポフィスと毎夜戦うラー神を護り助ける権能を付託したとしても不思議でないだろう。

なお、アブアセト女神をバハレイヤ・オアシスにお

けるイシス女神に擬える異見もある(Sherbiny and Bassir 2014: 180-181)。しかし、両女神が同じ画面上に登場する説明がつかない。また、イシス女神に付託する、オシリス神の妻、ホルス神・玉座の守護神、死者の喪主、魔術の女神などの権能が(Wilkinson 2003: 146-149)、ハリネズミの生態や習性になじまない点も、異見の成立を難しくする。

2例目として挙げた、パーエンネンティウ墓前室の角柱に描かれた神々は、セト神とネフティス女神を除く、ヘリオポリスの創世神話に登場する九柱神と一致する。太陽神であるラー=ホルアクティ神あるいはバネブジェデト神は、九柱神の太陽神であるアトゥム神と同一視できるため、アブアセト女神は世界の創造神の配偶神としての立場を得て、九柱神に比肩する非常に高い地位にあったことを意味する。

いずれにせよ、バハレイヤ・オアシスにおいて、アブアセト女神は存在感に満ちていた。それではなぜバハレイヤ・オアシスなのか、なぜハリネズミなのか、この女神はどこからやってきたのかなど、不明点が多い。今後の調査で図像や史料が増えることを俟つほかないが、パーエンネンティウはその名前からリビア系の出自であると推測されているので、神の出自もナイル河畔以外であることを念頭に置いて検討する必要があるだろう。

5. おわりに

その生態や習性から導かれたハリネズミの象徴性は一様ではなかった。もし大別するならば、以下の2点を挙げることができる。第一は防御・守護である。身体を丸め、針毛を立てて防御する姿勢からだけでなく、ヘビやサソリを捕食し、その毒に耐性があることも、危険から身を護ってくれる存在として人びとは信頼を寄せたに違いない。また、夜目が利くとする誤解から導かれた、視力や眼に関する象徴性も広く防御・守護に加えられる。第二は太陽の運行、特に夜の太陽の象徴であり、ひいては再生復活の象徴である。日没後に餌を求めて活動を開始し、夜明けに巣穴に戻る夜行性の習性と、砂漠・半砂漠地帯、あるいは墓域という生息環境がこの象徴観を生んだ。そして、日々繰り返されるハリネズミのこの行動が太陽運行のサイクルと重なって映り、さらに古代エジプト人が最も重視していた再生復活への希求と結び付いたのである。

ハリネズミはその能力が評価され、多くの器物の題材となったにも関わらず、神として尊崇の対象となった時代と地域は限定される。古代エジプト人が種々の動物のどのような点を評価して神の存在にまで昇華させたのかは定かでないが、いずれにせよ、ハリネズミを主要な神として奉戴することはなかった。

ところで、動物が持つ特別な能力、すなわち異能は、時として人間に害悪を及ぼすため、忌避の対象にもなり得た。そこで、古代エジプト人が神の座を与えなかった理由として、ハリネズミに負のイメージを抱いていた可能性があるならば、それを検討しておく必要がある。

生態や習性から導かれる負のイメージを概括すると次のようになろう。ハリネズミは人里から少し離れた半砂漠・砂漠地帯に生息しており、そこには墓域も含まれる。つまり、無秩序で混沌とした死の世界から闇夜に紛れてやって来るのである。そして、小さな身体にも関わらず、人間に害悪をもたらす恐ろしいヘビやサソリを捕食する姿は、人びとにとって不気味な存在に映ったであろう。

さらに、想像力を逞しく働かせることが許されるならば、ハリネズミをセト神と結び付けることができるかもしれない。砂漠や異国を司るセト神は、「オシリスとイシスの伝説」として知られる神話において、オシリス神を殺害し、王位を篡奪した王権の敵役であった。同時に、セト神はアポフィスの天敵としても知られ、冥界を航行する太陽神を護る神としての一面を併せ持つ。同じ砂漠を活動拠点とするハリネズミは、セト神と結び付けられたことで忌み嫌われ、神の地位を与えられなかったとは考えられないだろうか。アプアセト女神が、アポフィスから太陽神を護り助ける権能を持っていた可能性を指摘したが、これもハリネズミとセト神を結び付ける因子の一つに挙げることができるだろう²⁶⁾。

ところで、古代ギリシア文化圏では、後期青銅器時代にハリネズミ形リュトンが人気を博し、前6世紀にはハリネズミ形アリュバロスが流行した。それらに防御・守護などの象徴性を付与し、単なる容器以上の役割を担わせたことが流行を生む要因となったのだろう。ところが、少数例ではあるが、前6~5世紀の黒像式・赤像式土器（陶器）に描かれた図像において、不吉な結末が予想される場面や、主人公に脅威が降りかかる場面でハリネズミが登場することがあるという。そして、アンティング行動で塗り付ける泡を有害と見做すことと併せて、ハリネズミを不吉で有害な生き物とする見解もある（Mackay 2016）²⁷⁾。

また、ハリネズミが果実を針毛に刺して巣穴に運ぶ逸話は上述した通りだが、中世ヨーロッパで盛んに編まれた動物寓意譚に登場するハリネズミは悪人として扱われている（Collins 1913: 15）。キリスト教の聖職者たちによる説教においても、ハリネズミは卑怯な罪人として貶められており（Neale 1856: 246-247）、さらに、かの W. シェイクスピア（Shakespeare）も負のイメージを持つ動物として描いている²⁸⁾。動物寓意譚の底本となったのが、後2世紀あるいは後4世紀に

編まれたとされる『フィシオロギス（*Physiologus*）』である。そこでもすでにハリネズミは他人のものを略奪する悪人として語られる（Peters 1898: 26-27; Curley 1979: 24-25; Spencer 2012: 63-65）。『フィシオロギス』は、エジプトを含む各地の民間伝承と、前4世紀のアリストテレスの『動物誌』や、後1世紀の大プリニウスの『博物誌』を借用しながら、アレキサンドリア（Alexandria）で編まれたものとされる。そのため、プトレマイオス朝期からローマ属州期にかけての、古代エジプト人がハリネズミに対して抱いていたイメージが反映された可能性があるだろう。そうであるならば、当時の古代エジプト人はハリネズミに対して負のイメージを抱いていたことになる。

王朝時代の古代エジプト人はハリネズミの防御能力を高く評価し、ヘビやサソリに対する優位性に感銘を受け、彼らが最も望む来世での再生復活と、それを象徴する日々の太陽運行との繋がりをハリネズミの習性のなかに見出していた。ハリネズミは、こうした正のイメージを有する一方で、セト神と結びつく、不気味な存在としての負のイメージを潜在的に備えていたことが推断できよう。上記の通り、セト神も正と負の双方の属性を持つが、例えば、雌カバの姿で表されるタウェレト女神が妊娠・出産を司る女神として信仰を集めた一方で、カバは狂暴な動物として恐れられ、混沌を象徴する動物でもあった。また、人間にとって有害な動物であるヘビは、下エジプトの王権に関わるウアジェト女神や、王冠の額を飾るウラエウスの象徴として用いられた。こうした二元性が古代エジプト文明の大きな特徴の一つであることに鑑みれば、ハリネズミが陰陽双方の属性を備えていたと見做すことは道理に合うだろう。

イメージの変容がいつの時代に起こり、その要因となる背景がどのようなものであったのかを明らかにするためには、広くエーゲ海や東地中海、さらにはメソポタミアやペルシアにおけるハリネズミの象徴性を探求したり、キリスト教との布教との関連性も検討する必要があるため、今後の課題となる。

註

- 1) IUCN のレッドリストに従って5属16種とする（IUCN 2024）。しかし、中国でダウリアハリネズミ属（*Mesechinus*）の新種2種が同定されたり（Ai et al. 2018）、多くの亜種が知られているため（El-Farhati et al. 2020, 2021）、研究者によってその数に多少の違いがある。エジプトに生息するオオミミハリネズミも *H. aegyptius* と *H. libycus* の亜種に分ける場合がある（Osborn and Helmy 1980: 57-64）。なお、ペットとして飼育されている種は、アフリカハリネズミ属のヨツユビハリネズミ（*Atelerix albiventris*）と、アフリカハリネズミ属のアルジェリアハリネズミ（*A. algirus*）との交雑種とされる（Goertzen 2012: 10）。なお、和名は川田伸一郎ほか『世界哺乳類標準和名目録（哺乳類科学第58巻別冊）』に従っ

- た（川田ほか 2018）。
- 2) 2019 年に、南限とされるサマルトから 200 km 以上南に位置するソハーグ (Sohag) で、オオミミハリネズミの生息が確認されている (Abd El-Aleem 2019)。
 - 3) 繁殖期は種によって異なり、例えば、オオミミハリネズミは 7 月から 9 月に繁殖期を迎え、期間中に 1 回の出産を原則とする (Ballenger 1999)。一方、アルジェリアハリネズミは 10 月から 3 月に (Everett 2012)、キタイロハリネズミは 4 月から 9 月に繁殖期を迎え (Collins 2022)、両者ともに繁殖期間中に最大 2 回出産するという。
 - 4) アテネ出土の背中に小球を造形したハリネズミ形土製品は、まさに大プリニウスの記述通りであるから、前 4 世紀にはすでにこのような誤ったイメージが表出していた可能性がある (Thompson 1965: 79-82, plate 19-11)。
 - 5) 防御のために丸くなった姿を太陽に、針毛を太陽光線に見立てる見解もある (El-Elimi 2011: 99; Shaikh Al Arab 2019: 102)。
 - 6) ハリネズミを確認できる最古のレリーフは、第 4 王朝スネフェル王治世の「砂漠の狩猟の長」の称号を持つ高官の墓である。ハリネズミ、エジプトマンガース、ツチブタ？、ノウサギ、スナネズミの図像と解されているが (Droste zu Hülshoff 1980: 60)、ハリネズミ、スナネズミ、エジプトマンガース、ノウサギ、トビウサギを描いたように見える。
 - 7) 各地の墓のレリーフの実見、写真撮影を行うにあたり、畑守泰子氏、坂本麻紀氏、和田浩一郎氏、宮原晋一氏の協力を得た。また、エジプト滞在中は深見奈緒子氏に大変お世話になった。ここに記して、感謝の意を表します。
 - 8) 従来説に対して、文化人類学の知見を援用しながら再考しようとする流れもある (Brémont 2018)。
 - 9) 家畜化あるいは馴化するためにさまざまな野生動物を捕獲しており、古王国時代にはハイエナの家畜化を試みていたことが墓のレリーフから知られる。現代でこそペットとして人気のハリネズミであるが、古代において家畜化、馴化は難しかったとされる (Droste zu Hülshoff 1980: 22)。
 - 10) 伝統医療あるいは民間信仰の薬として、肉や皮や針毛を利用する例であれば、アジアとアフリカを中心に多くの民族例に見られ、その数は 20 か国以上におよぶ。現代のルーマニア東部の民族例でも、ハリネズミの針毛は婦人科系の疾患に効用があるとされ、かつては薄毛や下痢などの治療にも使われていたという。また、モロッコの民族例では、ハリネズミの皮革や針毛を燃やした煙を吸うことで発熱や泌尿器系の疾患に効用があるとされており、香辛料などを扱う店舗でハリネズミの皮革や生体が販売されている。利用目的は定かでないが、カイロでも乾燥皮が売られている (Osborn and Osbornová 1989; Sezik et al. 2001; Maghsudai 2007; Quave and Pieroni 2013; Nijman and Bergin 2015)。
 - 11) 同一墓に狩猟図とハリネズミ船、あるいは供献図とハリネズミ船の図像を描いた例はそれぞれ 1 例ずつであり、3 種すべての図像を描いた例は 1 例のみである。
 - 12) ハリネズミ船は、英語で「Henet-boat」[Hedgehog-boat] と呼ばれる。一般的に boat は手漕ぎの小型の「舟」を意味し、ship が動力を備えた大型の「船」を指す。古代エジプトの「ふね」は、オールを用いた櫂船、または帆を張った帆船であるため、动力的には「舟」の字を充てることが相応しい。しかし、長さ 30 m を超す大型帆船も珍しくはなく、また、図像は実際のサイズを正確に伝えるものではないことから、本稿では一律に「船」を用いる。パピルス船も同様とする。また、ハリネズミ船のハリネズミは、通常船首のみに造形されるが、エジプト中部の
- メイル遺跡 (Meir) の D2 号墓に、船尾にも同様のハリネズミの頭部を描いた例がある (図 3-3 参照)。
- 13) ハリネズミは短距離を泳ぎ、丸まって水に浮くことができるため、船首のデザインとして採用することの妥当性を認める見解もある (Hamilton 2022: 9)。
 - 14) 通常、ハリネズミ船が帆船、パピルス船が櫂船であるが、ハリネズミ船を櫂船として表現する場合がある。その場合には一定の法則がある。それは 2 隻以上の櫂船船団の 2 隻目 (2 番目) に配置する場合である。そして、その船団は櫂船のパピルス船が先導する。パピルス船を帆船として描く場合も同様であり、帆船船団の 2 隻目に配置し、帆船のハリネズミ船が先導する (Altenmüller 2002: 275-278, 2005: 11-14)。
 - 15) デルタ地帯にある、先王朝および初期王朝時代のテル・アウラド・ダウード (Tell Awlad Dawood) 遺跡出土の土製船模型片のうちの 1 点が、最古の「ハリネズミ船」として言及されている (Abd El-Krim and Nassef 2021)。しかし、動物種を特定できる描写ではなく、さらにその顔が進行方向を向くなど、「ハリネズミ船」の特徴を備えていない。そのため、この製品をハリネズミ船の例からは除外する。
 - 16) ギザの Ka-ni-nisut 墓 (G2155) のレリーフに添えられた銘文には、ハリネズミ船がブト (Buto) から南方の「供物の野」へ向かい、パピルス船が不明の町からヘリオポリス (Heliopolis) に向かう、具体的な航路が記されている (Hamilton 2022: 14-15)。
 - 17) テーベ (Thebes) 地域において、中王国時代にはファイアンス製品の副葬が流行していたものの、第 2 中間期後半には突然見られなくなるという。また、エジプト国内において、中王国時代のファイアンス製品は墓からの出土が多数を占め、神殿からの出土例はほとんど見られない (Miniaci 2017: 264-265)。なお、同時代のビブロス (Byblos) では、10 点のファイアンス製ハリネズミ小像を含む 250 点以上のファイアンス製品が神殿 (Obelisk Temple) から出土している (Miniaci 2017: 258; Abi Zeid 2018)。
 - 18) Brooklyn Museum 所蔵品 (59.186) は、X 線撮影によって、内部に小さな粒が入っていることが確認されている。また、Bolton Museum 所蔵品 (BOLMG: 1886.31.58.f) は、長さ 9.0 cm、幅 6.5 cm、高さ 5.4 cm を測る無釉の土製小像であるが、こちらにも振ると音が鳴るという。
 - 19) 動物学などの専門家の鑑定を受けたわけではないが、全体の大きさと形状、手足の様子、とげとげしく、引っ掛かるような毛根などからハリネズミと判断した。針毛は意図的に脱毛されたのか、自然と抜け落ちた結果なのか判断できない。大英博物館所蔵の 19 世紀末や 20 世紀初頭の現代アフリカの護符として利用されたハリネズミの皮には (BM Af 1913, 1013.37, BM Af.6103)、依然として針毛が残る。
 - 20) パハレイヤ・オアシスおよびファラフラ・オアシスの調査は 1938 年から数回に亘って実施された。パーエンネンティウ墓は 1938 年に発見され、簡単な調査報告が発表されているが、アプアセト女神には言及していない (Fakhry 1938, 1939, 1940)。
 - 21) 被葬者の名前の表記は「Ba-n-nentiu」が最も使われている。しかし、墓には複数の異なる表記があるため、最初の報告者のファクリーを含めて、多くの研究者がさまざまな転写を行っている。また、その名前はエジプト系としては一般的でないため、リビア起源と考えられている (Fakhry 1942; Sherbiny and Bassir 2014)。なお、カタカナ表記については、取り急ぎ、ファクリーの報告書の表記「Ba-n-nentiu」から「パーエンネンティウ」とした。

- 22) パーエンネンティウ墓に隣接して、父親のジェドアムンイウエフアंक (Djed-amun-uef-ankh) の墓がある。同様のプランを持つが、そこにアブアセト女神は描かれていない (Fakhry 1942: 49-63; Porter and Moss 1975: 305)。このことは息子のパーエンネンティウがアブアセト女神信仰を開始したことを意味するかもしれない。また、パーエンネンティウが創造し、個人的に崇拝した神の可能性もあるが、離れた地区にある被葬者不明の墓にも描かれていることから、少なくともバハレイヤ・オアシスでは認知され、信仰されていたと思われる。
- 23) 太陽円盤を頂く雄ヒツジの頭部を持つこの男神について、パネブジェト神とする見方が多いものの (Fakhry 1942; Shaikh Al Arab 2019)、パー＝ラー神とする説もある (Sherbiny and Bassir 2014)。壁画の男神の前の銘文は「*dd mdw jn B3-(R)*」*[nb pt dj[=f] 'nh]* (Words spoken by Ba(Re), Lord of Heaven, may [he] give life) とあり (Sherbiny and Bassir 2014: 183)、「パー」としか書かれておらず、神の名は明記されていない。
- 24) この墓は Shaikh Al Arab 2019 で初めて紹介され、報告書などは未刊行と思われ、詳細な報告が俟たれる。
- 25) このタイプの冠は、額にウラエウスが付く例と、ハゲワシの頭がコブラ (ウラエウス) に置き換わっている例がある。1 例目の図像は該当部が剥落していて現況では視認できないが、ファクリーの報告ではウラエウスとして描かれている (Fakhry 1942: fig. 35)。実見した 2 例目は、ウラエウスは付かずハゲワシの頭のままのように見えた。3 例目はコブラが付いていると報告されており、パピルス杖を手に行っている点で 1・2 例目と異なる (Shaikh Al Arab 2019: 85-92, figs. 2-9)。
- 26) ハリネズミの英語名である hedgehog は「生け垣のブタ」を意味し、その鳴き声と鼻面の形がブタに似ていることに由来する。また、後 2~4 世紀に編まれた『フィシオロゴス』にも、ハリネズミの容姿がブタに似ていることが記されている。そして、セト神が結び付けられているさまざまな動物のなかにはブタが含まれる。つまりブタを介して、ハリネズミとセト神を結び付けることができるかもしれない。
- 27) ホメロスと並び称されたという、前 7 世紀のギリシアの詩人アルキロコス (Archilochus) は、「キツネは多くのことを知っているが、ハリネズミは大きなことを一つだけ知っている」という一節を残した。彼が実際に何を意図したのかは定かでないが、おそらく狡猾なキツネに対して、愚直なハリネズミという対比を表していると思われる。そうであるならば、他人から略奪するような負のイメージは付随していない。
- 28) シェイクスピアの『リチャード 3 世』では、身体を丸めて身を護る習性を持つハリネズミは、悪行を隠し、その罪から逃れようとしていることを示唆する動物として用いられている。また、『マクベス』では、魔女の呪文に登場し、ハリネズミは悪霊の化身として扱われている。

略号

- Aristotle= Aristotle, *History of Animals*, Book IX, translated by D. W. Thompson. <https://penelope.uchicago.edu/aristotle/histanimals9.html> (2024 年 3 月 15 日閲覧)
- Dioscorides= Pedanius Dioscorides, *De Materia Medica*. Osbaldeston, T. A. 2000 *De Materia Medica: Being an Herbal with Many Other Medicinal Materials Written in Greek in the First Century of the Common Era*. Johannesburg, Ibdidis Press.

Hdt= Herodotus, *The Histories*. Translated by A. D. Godley. <https://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus:text:1999.01.0126> (2024 年 3 月 15 日閲覧)

Pliny= Pliny, the Elder, *The Natural History*. Translated by J. Bostock and H. T. Riley. <https://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Plin.+Nat.+toc> (2024 年 3 月 15 日閲覧)

参考文献

- Abd El-Aleem, S. S. D. 2019 New Record of Long-Eared Hedgehog, *Hemiechinus Auritus* (Gmelin, 1770) in Sohag Governorate, Egypt. *World Journal of Agriculture and Soil Science* 2(3): 1-2.
- Abd El-Krim, E. G. and A. S. Nassef 2021 Six Unusual Boats from Tell Awlad Dawood in the Nile Delta. *Journal of the General Union of Arab Archaeologists* 6(2): 1-24.
- Abi Zeid, L. 2018 La Fonction Rituelle des Figurines Zoomorphes en Faïence du Temple aux Obélisques à Jbeil (Byblos) et les Rites Funéraires. *Bulletin d'Archéologie et d'Architecture Libanaises* 18: 305-346.
- Ai, H-S., K. He, Z-Z. Chen, J-Q. Li, T. Wan, Q. Li, W-H. Nie, J-H. Wang, W-T. Su and X-L. Jiang 2018 Taxonomic Revision of the Genus *Mesechinus* (Mammalia: Erinaceidae) with Description of a New Species. *Zoological Research* 39(5): 335-347.
- Altenmüller, H. 2000 Die Nachtfahrt des Grabherrn im Alten Reich zur Frage der Schiffe mit Igelkopfbüg. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 28: 1-26.
- Altenmüller, H. 2002 Funerary Boats and Boat Pits of the Old Kingdom. *Archiv Orientalní* 70: 269-290.
- Altenmüller, H. 2005 Licht und Dunkel, Tag und Nacht: Programmatik aus der Dekoration der Gräber des Alten Reiches. In S. J. Seidlmayer (ed.), *Texte und Denkmäler des ägyptischen Alten Reiches*, 9-26. Berlin, Achet-Verlag.
- Arnold, D. 1995 An Egyptian Bestiary. *The Metropolitan Museum of Art Bulletin* 52(4): 3-64.
- Ashbacher, M. L. 2017 *Zoomorphic Representations in Early Cycladic Art: A Catalogue Reference List*. Master thesis, University of Oklahoma. <https://shareok.org/handle/11244/50847> (2023 年 10 月 31 日 閲覧)
- Ballenger, L. 1999 *Hemiechinus auritus*. *Animal Diversity*. https://animaldiversity.org/accounts/Hemiechinus_auritus/ (2023 年 10 月 31 日 閲覧)
- Bartnik, A. 2019 Jeź z jabłkiem na grzbiecie: Kilka słów o postrzeganiu jeży w antyku i średniowieczu. *Wiadomości Zootechniczne* 57: 129-137.
- Ben-Shlomo, D. 2008 Zoomorphic Vessels from Tel Migne-Ekron and the Different Styles of Philistine Pottery. *Israel Exploration Journal* 58(1): 24-47.
- Ben-Shlomo, D. 2010 *Philistine Iconography: A Wealth of Style and Symbolism*. Göttingen, Vandenhoeck und Ruprecht.
- Bémont, A. 2018 Into the Wild?: Rethinking the Dynastic Conception of the Desert beyond Nature and Culture. *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 17: 1-17.

- Brooklyn Museum 2019 Collection: Egyptian, Classical, Ancient Near Eastern Art. *Brooklyn Museum*. <https://www.brooklynmuseum.org/opencollection/collections/5> (2024年3月15日閲覧)
- Collins, A. H. 1913 *Symbolism of Animals and Birds: Represented in English Church Architecture*. New York, McBride, Nast.
- Collins, S. 2022 *Erinaceus*. *Animal Diversity*. <https://animaldiversity.org/accounts/Erinaceus/> (2023年10月31日閲覧)
- Curley, M. 1979 *Physiologus*. Chicago, University of Chicago Press.
- Darwin, C. R. 1867 Hedgehogs. *Hardwicke's Science-Gossip* 3 (1 December): 280.
- Davies, N. de G. 1900 *The Mastaba of Ptahhetep and Akhetetep*. Part I. London, The Egypt Exploration Fund.
- Davies, N. de G. 1920 *The Tomb of Antefoker, His Wife, Senet*. London, George Allens and Unwin, Ltd.
- Davies, W. V. (ed.) 2001 *Colour and Painting in Ancient Egypt*. London, British Museum Press.
- Droste zu Hülshoff, Vera von 1980 *Der Igel im alten Ägypten*. Hildesheim, Gerstenberg Verlag.
- Duell, P. 1938 *The Mastaba of Mereruka*. Part I. Chicago, The University of Chicago Press.
- El-Elimi, F. H. 2011 L'iconographie Égyptienne du Hérisson. *Cahiers Caribéens d'Égyptologie* 15: 99–108.
- El-Farhati, H., B. Jaziri, H. W. Hizem and S. Noura 2020 Distribution, Bioclimatic Niche and Sympatry of Two Erinaceidae in Tunisia. *African Journal of Ecology* 58(2): 193–210.
- El-Farhati, H., M. Khaldi, A. Ribas, M. W. Hizem, S. Noura, and V. Nicolas 2021 Evolutionary History of the Two North African Hedgehogs (Mammalia: Erinaceidae) *Atelerix algirus* and *Paraechinus aethiopicus* based on Phylogeography and Species Distribution Modelling. *Vertebrate Zoology* 71: 799–811.
- Erman, A. and H. Grapow 1971 *Wörterbuch der ägyptischen Sprache* (abb. Wb). Band III. Berlin, Akademie-Verlag.
- Evans, L. 2010 *Animal Behaviour in Egyptian Art: Representations of the Natural World in Memphite Tomb Scenes*. Oxford, Aris and Phillips.
- Evans, L. 2015 *Animal Behaviour in Egyptian Art: A Brief Overview*. In P. Kousoulis and N. Lazaridis (eds.), *Proceedings of the Tenth International Congress of Egyptologists*, 1653–1666. Leuven, Peeters Publishers.
- Evans, L. 2020 Ancient Egyptian Response to the Natural World. In J. Janák and M. Bárta (eds.), *Profane Landscapes, Sacred Spaces*, 71–80. Sheffield, Equinox.
- Evans, L. and P. Weinstein 2021 Begone from Me, O Crooked-Lips!: Integrated Pest Management in Ancient Egypt. *American Entomologist* 67(1): 47–53.
- Everett, A. 2012 *Atelerix algirus*. *Animal Diversity*. https://animaldiversity.org/accounts/Atelerix_algirus/ (2023年10月31日閲覧)
- Fakhry, A. 1938 Bahria and Farafra Oases: A Preliminary Note on the New Discoveries (with eleven plates). *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 38: 397–437.
- Fakhry, A. 1939 Bahria and Farafra Oases: Second Preliminary Report on the New Discoveries. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 39: 627–642.
- Fakhry, A. 1940 Bahria and Farafra Oases: Second Preliminary Report on the New Discoveries. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 40(2): 855–871.
- Fakhry, A. 1942 *The Egyptian Deserts: Bahria Oasis*, vol. 1. Cairo, Government Press.
- Fakhry, A. 1961 *The Monuments of Sneferu at Dahshur, Vol. II: The Valley Temple, Part II: The Finds*. Cairo, General Organization for Government Printing Offices.
- Germond, P. 2001 *An Egyptian Bestiary*. London, Thames and Hudson.
- Ghalioungui, P. 1987 *The Ebers Papyrus: A New English Translation, Commentaries and Glossaries*. Cairo, Academy of Scientific Research and Technology.
- Goertzen, K. 2012 *Pet African Hedgehogs: A Complete Guide to Care*. www.westcoasthedgehogs.com/files/hedgehogbook/index.html (2023年10月31日閲覧)
- Hamilton, J. C. F. 2022 Hedgehogs and Hedgehog-Head Boats in Ancient Egyptian Religion in the Late 3rd Millennium BCE. *Arts, special issue: Animals in Ancient Material Cultures* 3: 1–31.
- Hanasaka, T. 2020 Finds from the Excavation Area. In H. Kawanishi, S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.), *Preliminary Report AKORIS 2019*, 14–18. Nagoya, Nagoya University.
- Hannig, R. 2000 *Großes Handwörterbuch: Deutsch-Ägyptisch (2800-950 v. Chr.)*. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Houlihan, P. 2001 Hedgehogs. In D. B. Redford (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. II, 87–88. Oxford, Oxford University Press.
- Ikram, S. 1995 *Choice Cuts: Meat Production in Ancient Egypt*. Leuven, Peeters.
- Ikram, S. (ed.) 2005 *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.
- iNaturalist 2024a photo 1537760, (c) Roberto Sindaco (CC BY-NC-SA). *iNaturalist*. <https://www.inaturalist.org/photos/1537760?size=original> (2024年3月15日閲覧)
- iNaturalist 2024b photo 234176976, (c) gil_dunsky (CC BY-NC). *iNaturalist*. <https://www.inaturalist.org/photos/234176976?size=original> (2024年3月15日閲覧)
- iNaturalist 2024c photo 29813042, (c) Jay (CC BY-NC-SA). *iNaturalist*. <https://www.inaturalist.org/photos/29813042?size=original> (2024年3月15日)
- IUCN 2024 *The IUCN Red List of Threatened Species, ver. 2023-1*. International Union for Conservation of Nature and Natural Resources (国際自然保護連合絶滅危惧種レッドリスト) <https://www.iucnredlist.org/> (2024年2月28日閲覧)
- Junker, H. 1934 *Giza II: Grabungen auf dem Friedhof des Alten Reiches*. Wien und Leipzig, Holder-Pichler-Tempsky A. G.
- Koehl, R. B. 2018 From the Near East to the Aegean, from Neolithic Times to the End of the Bronze Age. In S. Ebbinghaus (ed.), *Animal-Shaped Vessels from the*

- Ancient World: Feasting with Gods, Heroes, and Kings*, 44-85. Harvard Art Museums.
- Kubala, A. 2017 A Faience Aryballos in the Collection of the University Museum at Wrocław. *Studies in Ancient Art and Civilization* 21: 77-86.
- Leitz, C. (ed.) 2002 *Lexikon der Ägyptischen Götter und Götterbezeichnungen*, Band II. Leuven, Peeters Publishers and Department of Oriental Studies.
- Leonard Jr., A. 2000 Why a Hedgehog. In L. E. Stager, J. A. Greene and M. D. Coogan (eds.), *The Archaeology of Jordan and Beyond: Essays in Memory of James A. Sauer*, 310-316. Leiden, Brill.
- Mackay, E. A. 2016 The Baneful Hedgehog of Ancient Greece. In R. Landgráfová and J. Mynářová (eds.), *Rich and Great: Studies in Honour of Anthony J. Spalinger on the Occasion of his 70th Feast of Thoth*, 233-237. Prague, Charles University.
- Maghsudai, M. 2007 The Native Women Healers of Turkmeni-Sahara in Iran. *Iran and the Caucasus* 11(1): 1-9.
- Maître, J. 2017 Le Hérissou du Désert, Protecteur des Morts et des Vivants. *Archéologia (Dijon)* 551: 60-63.
- Miniati, G. 2017 Unbroken Stories: Middle Kingdom Faience Figurines in Their Archaeological Context. In G. Miniati, M. Betrò and S. Quirke (eds.), *Company of Images: Modelling the Imaginary World of Middle Kingdom Egypt (2000-1500 BC)*, 235-284. Leuven, Paris and Bristol, Peeters.
- Neale, J. M. 1856 *Mediæval Preachers and Mediæval Preaching: A Series of Extracts, Translated from the Sermons of the Middle Ages, Chronologically Arranged; With Notes and an Introduction*. London, J. & C. Moziley.
- Nijman, V. and D. Bergin 2015 Trade in Hedgehogs (Mammalia: Erinaceidae) in Morocco, with an Overview of Their Trade for Medicinal Purposes throughout Africa and Eurasia. *Journal of Threatened Taxa* 7(5): 7131-7137.
- Osborn, D. J. and I. Helmy 1980 *The Contemporary Land Mammals of Egypt (Including Sinai)*. Chicato, Field Museum of Natural History.
- Osborn, D. J. and J. Osbornová 1989 *The Mammals of Ancient Egypt*. London, Art and Philipps.
- Peters, E. 1898 *Der Griechische Physiologus und seine orientalischen Übersetzungen*. Berlin, Verlag von S. Calvary.
- Petrie, W. M. F. 1901 *Diospolis Parva: The Cemeteries of Abadiyeh and Hu*. London, The Egypt Exploration Fund.
- Porter, B. and R. L. B. Moss 1975 (1952) *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs, and Paintings, VII: Nubia, The Deserts, and Outside Egypt*. Oxford, Griffith Institute, Ashmolean Museum.
- Quave, C. and A. Pieroni 2013 Mediterranean Zootherapy: A Historical to Modern Perspective. In R. R. N. Alves and I. L. Rosa (eds.), *Animals in Traditional Folk Medicine*, 303-316. Heidelberg, New York, Dordrecht and London, Springer.
- Rasmussen, S. L., J. Larsen, R. E. van Wijk, O. R. Jones and T. B. Berg 2019 European Hedgehogs (*Erinaceus europaeus*) as a Natural Reservoir of Methicillin-resistant *Staphylococcus Aureus* Carrying *mecC* in Denmark. *PLoS ONE* 14(9); e0222031. doi.org/10.1371/journal.pone.0222031.
- Rasmussen, S. L., T. B. Berg, H. J. Martens and O. R. Jones 2023 Anyone Can Get Old-All You Have to Do Is Live Long Enough: Understanding Mortality and Life Expectancy in European Hedgehogs (*Erinaceus europaeus*). *Animals* 13(4); 626. doi.org/10.3390/ani13040626.
- Recht, L. 2014 Transformers Energize!: Aegean Bronze Age Rhyta in Moments of Transformation. In A. Boken and C. Rowan (eds.), *Embodying Value?: The Transformation of Objects in and from the Ancient World*, 35-51. London, British Archaeological Reports Ltd.
- Santana, E. M., H. E. Jantz and T. L. Best 2010 *Aterix Albiventris* (Erinaceomorpha: Erinaceidae). *Mammalian Species* 42(857): 99-110.
- Schäfer, H. 1986 *Principles of Egyptian Art*. Oxford, Griffith Institute.
- Sezik, E., E. Yeşilada, G. Honda, T. Yoshihisa, Y. Takeda and T. Tanaka 2001 Traditional Medicine in Turkey X: Folk Medicine in Central Anatolia. *Journal of Ethnopharmacology* 75: 95-115.
- Shaikh Al Arab, W. 2019 The Hedgehog Goddess Abaset. *Papyrologica Lupiensia* 28: 83-102.
- Sherbiny, H. and H. Bassir 2014 The Representation of the Hedgehog Goddess Abaset at Bahariya Oasis. *Journal of the American Research Center in Egypt* 50: 171-189.
- Spencer, S. E. 2012 *The Regional Impact on Medieval Text and Image: Exploring Representations of Anti-Semitism in English and Northern French Medieval Bestiaries*. New York, Syracuse University Honors Program Capstone Projects.
- Strandberg, Å. 2009 *The Gazelle in Ancient Egyptian Art: Image and Meaning*. Uppsala, The Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University.
- Tavares, A. 2014 Prickly Protection: Sailing in a Hedgehog Boat. *AERAGram* 15(1-2): 36.
- Tavares, A., D. Jones, F. Sadarangani and H. Mahmoud 2015 Excavations East of the Khentkawes Town in Giza: A Preliminary Site Report. *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 114: 519-562.
- The Metropolitan Museum of Art 2024 The Met Collection. *THE MET* <https://www.metmuseum.org/art/collection> (2024年3月15日)
- The Trustees of the British Museum 2024 Explore the Collection. *The British Museum* <https://www.britishmuseum.org/collection> (2024年3月15日)
- Thompson, D. B. 1965 Three Centuries of Hellenistic Terracottas. *The Journal of the American School of Classical Studies at Athens* 34(1): 34-71.
- van Haarlem, W. M. 1996 A Remarkable 'Hedgehog-Ship' from Tell Ibrahim Awad. *Journal of Egyptian Archaeology* 82: 197-198.
- Webb, V. 1978 *Archaic Greek Faience: Miniature Scent Bottles and Related Objects from East Greece, 650-500 B.C.* Warminster, Aris and Phillips Ltd.

- Webb, V. 2015 Archaic Mixed Style Faience Vessels. In A. Villing, M. Bergeron, G. Bourogiannis, A. Johnson, F. Leclère, A. Masson and R. Thomas, *Naukratis: Greeks in Egypt. British Museum Online Research Catalogue*. https://webarchive.nationalarchives.gov.uk/ukgwa/20190801123844/https://www.britishmuseum.org/research/online_research_catalogues/ng/naukratis_greeks_in_egypt/material_culture_of_naukratis/mixed_style_faience_vessels.aspx (2024年3月15日閲覧)
- Webb, V. 2016 *Faience Material from the Samos Heraion Excavations*. Wiesbaden, Reichert Verlag.
- Wendorf, F. and R. Schild 1995/1996 Nabta Playa during the Early and Middle Holocene. *ANKH Revue d'Egyptologie et des Civilisations africaines* 4/5: 33-45.
- Wikimedia Commons 2002 File: Hedgehogs-British Library Royal 12 F xiii f45r (detail). *Wikimedia Commons*. [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hedgehogs_-_British_Library_Royal_12_F_xiii_f45r_\(detail\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hedgehogs_-_British_Library_Royal_12_F_xiii_f45r_(detail).jpg) (2024年3月15日閲覧)
- Wilkinson, R. H. 1994 *Symbol and Magic in Egyptian Art*. London, Thames and Hudson.
- Wilkinson, R. H. 2003 *The Complete Gods and Goddesses of Ancient Egypt*. London, Thames and Hudson.
- 川田伸一郎・岩佐真宏・福井 大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽 創・姉崎智子・横畑泰志 2018『世界哺乳類標準和名目録（哺乳類科学 第58巻別冊）』日本哺乳類学会。